

2014.6.19
vol.32

シネマ・ド・リぶらの コラム・ド・シネマ

映画
を
読む

本日の上映作品

舞踏会の手帖



『モンパルナスの夜』などで知られる巨匠、ジュリアン・デュヴィヴィエ監督による名作ドラマ。戦前のフランス映画の典雅さと人間ドラマの豊潤さを堪能できる映画。

36歳にして未亡人になってしまったクリスチーネは、遺品を整理しているうちに、彼女が社交界にデビューした16歳の時の舞踏会の手帖を発見する。よみがえる華やかな舞踏会の光景や耳元で愛をささやいた男たちの声……。

“あの紳士達は今、何処でどうしているのだろう”彼女は、もう一度人生をやり直す糸口として、20年を経て、手帖の男たちを訪ねる旅に出る……。

監督 ジュリアン・デュヴィヴィエ

出演 マリー・ベル

フランソワーズ・ロゼー

音楽 モーリス・ジョベール

製作 1937年フランス

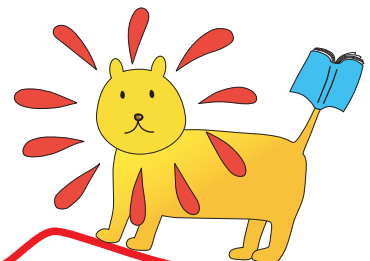
上映時間 130分

※ 1939年キネマ旬報ベストテン第1位



本日は「サロン・ド・シネマ」に替え、
災害時の避難についてご案内します。
開場後は、お席に着いてお待ち下さい。

会場が明るくなるまで、
席を立たないようにお願いします。



りぶらいおん©LSC

映画を読む

『舞踏会の手帖』

艶なる宴の終わり K.M.

今回上映の『舞踏会の手帖』は、『望郷』に続くデュヴィヴィエ監督初期の代表作の一つで、1937年度ヴェネチア映画祭で外国映画賞を受賞し、翌1938年日本でも公開されました。

『舞踏会の手帖』にまつわる思い出めぐりの旅を、マリー・ベル、フランソワーズ・ロゼーほか名優の競演と、独立した短編を「思い出めぐり」というテーマで紡いだ、「オムニバス形式」という新しいスタイルで映像化した作品です。太平洋戦争前夜、日中戦争のさなかの日本でも好評を博し、『オーケストラの少女』、『モダン・タイムス』らを抑えて、1938年度キネ旬ベストテンの第1位を獲得しました。因みに、少し遅れて公開された同監督の『望郷』も、翌1939年度のキネ旬ベストテンの第1位を獲得しています。

私にとってこの作品は、映画好きだった両親の影響で、タイトルと主演俳優の名前だけは子供の頃から知っていましたが、観るのは今回の上映に先立つDVDの下見が初めてでした。

ノスタルジックな甘さの中に厭世的な苦さが加わった味わい深いこの作品で語られた、いくつかの思い出と過酷な現実の再会エピソードの中で一番印象深かったのは、「凍てつける公園を影ふたつ過ぎ去りぬ……」という詩を口ずさんで、クリスティーヌに愛を語った純情な青年ピエールが、今は不逞の男ジョーに変身していたという二番目のエピソードでした。観終わった後も、この不逞の男を演じたルイ・ジューヴェの「目力」と、ただならぬ風貌と彼が誦する詩の一節が頭から離れませんでした。

ルイ・ジューヴェという俳優と「影二つ……」の詩については全く知識がなかったので、後で少し調べてみたので断片的ですが紹介します。

<ルイ・ジューヴェ>

- ・1887年12月24日生まれのパランスの俳優、演出家、劇団主宰者。
- ・パリを本拠として、国内外へも度々巡演。当代の新作のほか、古典とくにモリエールを、演出・演技。
- ・ジャン・ジロドゥとの交わりも深く、彼の14篇の戯曲のうち13篇を、ジューヴェが初演した。
- ・苦しい劇団財政への配慮から、1933年(45歳)映画『トパーズ』に出演し、以降も『女だけの都』・『旅路の果て』・『舞踏会の手帖』などに頻繁に出演し、日本の映画ファンにも親しまれた。
- ・大戦中は中南米を巡演。パリ解放後直ちに帰国し、ド・ゴールから国立劇場コメディ・フランセーズ総支配人就任を要請されたが固辞。アテネ劇場で劇団を再編し、ジロドゥの遺作初演でパリに復活。
- ・1951年アテネ劇場で稽古した夕に倒れ、2日後に楽屋で没した。
- ・演劇界では大御所だったジューヴェだが、映画では監督に従順な俳優だったようで、デュヴィヴィエは、「映画が好きでなかった彼を、映画は尊敬した」と追悼した。

<“感傷的対話” ポール・ヴェルレーヌ>

ルイ・ジューヴェが誦した詩「凍てつける公園を影ふたつ過ぎ去りぬ……」は、ポール・ヴェルレーヌの初期の作品“艶なるうたげ”の、最終章“感傷的対話”でした。老いた二人の亡霊が、冷めてしまった愛を思い出しながら語り合っているという、まさに宴の最終章にふさわしい、そしてこの作品のテーマを象徴するような詩でした。

1930年代のフランス映画

<http://french.rose.ne.jp/film/year/1930.html>

1939年	<ul style="list-style-type: none"> ・キネマ旬報ベストテンで「望郷」が第1位 ・第二次大戦始まる
希望 テルエルの山々	
ゲームの規則	
日は昇る (マルセル・カルネ)	
1938年	<ul style="list-style-type: none"> ・キネマ旬報ベストテンで「舞踏会の手帖」が第1位
北ホテル	
霧の波止場	
獣人	
旅路の果て	
ラ・マルセイエーズ	<ul style="list-style-type: none"> ・ルイ・デリュック賞の創設 ・キネマ旬報ベストテンで「女だけの都」が第1位
1937年	
大いなる幻影	
格子なき牢獄	
舞踏会の手帖	<ul style="list-style-type: none"> ・アンリ・ラングロワがシネマテーク・フランセーズを創設 ・キネマ旬報ベストテンで「ミモザ館」が第1位
望郷	
1936年	
うたかたの恋	
美しき青春	
禁男の家	
ジェニイの家	<ul style="list-style-type: none"> ・キネマ旬報ベストテンで「最後の億万長者」が第1位 ・ルネ・クレール、イギリスに渡る
どん底	
我等の仲間	
1935年	
女だけの都	<ul style="list-style-type: none"> ・日本でフランス映画の人気が高まる。フランス映画の黄金時代始まる
地の果てを行く	
ゴルゴダの丘	

1934年	<ul style="list-style-type: none"> ・フランス・シネマ大賞の創設 ・キネマ旬報ベストテンで「商船テナシチー」が第1位
アタラント号	
乙女の湖	
商船テナシチー	
白き処女地	
はだかの女王	
ミモザ館	
最後の億万長者 (ルネ・クレール)	<ul style="list-style-type: none"> ・キネマ旬報ベストテンで「自由を我等に」が第1位
1933年	
外人部隊	
新学期 操行ゼロ	
ドン・キホーテ	<ul style="list-style-type: none"> ・キネマ旬報ベストテンで「自由を我等に」が第1位
モンパルナスの夜	
1932年	
にんじん	<ul style="list-style-type: none"> ・日本でフランス映画の人気が高まる。フランス映画の黄金時代始まる
バ里祭	
素晴らしき放浪者 (ジャン・ルノワール)	
1931年	
自由を我等に	<ul style="list-style-type: none"> ・日本でフランス映画の人気が高まる。フランス映画の黄金時代始まる
マリウス	
牝犬	
ル・ミリオン	
1930年	
詩人の血	<ul style="list-style-type: none"> ・日本でフランス映画の人気が高まる。フランス映画の黄金時代始まる
巴里の屋根の下	
資本家ゴルダ (ジュリアン・デュヴィヴィエ)	



『映画 100年 STORY まるかじり フランス篇』	村山匡一郎	朝日新聞社	778.2
『わがフランス映画誌』	山田 宏一	平凡社	778.235
『フランス映画の社会史』	ピエール・マイヨー	日本経済評論社	778.04
『シネマディクトJ』の映画散歩 フランス編』	植草 甚一	晶文社	778.2
『中条省平の秘かな愉しみ』	中条 省平	清流出版	778.04
『古き良き時代の外国映画』	本吉 瑠璃夫	文芸社	N 778.2
『一秒四文字の決断 セリフから覗くフランス映画』	山崎 剛太郎	春秋社	778.235
『字幕の名工 秘田余四郎とフランス映画』	高三 啓輔	白水社	778.09

シネマ・ド・リぶら 次回上映会のご案内

vol.
33

嵐が丘



9月18日(木)

① 10:30 ~ 11:45

② 14:00 ~ 15:45

エミリー・ブロンテの原作を格調高く映画化した巨匠ワイラーの古典的名作。お互いに深く愛し合いながらも、結ばれなかった男と女の時空を越えた愛の結末……。

監督 ウィリアム・ワイラー
出演 ローレンス・オリヴィエ
マール・オベロン
デヴィッド・ニーヴン
原作 エミリー・ブロンテ
音楽 モーリス・ジョベール
製作 1939年 アメリカ
上映時間 104分

特別上映会のご案内 (入場料 1,000円)

8月21日(木) 『じんじん』

① 10:30 ~ ② 14:00 ~ ③ 18:15 ~

企画・主演：大地康雄 監督：山田大樹
絵本の里を舞台に描かれる親子の絆の物語。

今後の上映予定 (毎回木曜日)

10月16日 『英国王のスピーチ』

12月18日 『武器よさらば』

1月15日 『死刑台のエレベーター』

2月19日 『フラガール』

※開催日および上映作品は、変更になる場合があります。

『バグダッド・カフェ』感想

- ・素敵な映画でした。こういう映画は、なかなかシネマ・コンプレックスでは見られないのでうれしかったです。
- ・何回目かの『バグダッド・カフェ』でしたが、大きなスクリーンで見るのは初めてでした。ほんのり、じんわりの素敵な映画ですね。
- ・中学生の時観て、良い印象を持っていた記憶で来ました。すごく良かった。そしてこの企画が素晴らしい。
- ・ひびきわたる「コーリング・ユー」が耳に心地よい。ラストもサイコー！
- ・シネマ・ド・リぶらの上映作品としては新しい作品だったせいか、比較的若い世代の参加者が多かった。

「シネマ・ド・リぶら」の賛助サポーター 受付中！ 年間：1口 2,000円から

託児：500円 (各回6名まで)
申込みは、1週間前までに
市民活動センターへ。

図書館のDVD資料だけでは、無料で上映できる作品が限られています。あなたの賛助で、上映作品の幅が広がります。登録は市民活動センターへ。相談窓口：戸松 090-6574-3312